HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドイツ語の存在文をめぐって
Author(s)	最上, 英明
Citation	独語独文学科研究年報, 13, 71-86
Issue Date	1987-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/25744
Type	bulletin (article)
File Information	13_P71-86.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ドイツ語の存在文をめぐって

最　上　英　明

0. はじめに

ドイツ語の存在文に関しては、英語における there 構文のような存在表現のための明確な統語標識が見当たらないためか、文法の分野ではこれまでほとんど正面から扱われることもなく[1]、また研究の数もあまり多くないように思われる。そこで本論ではドイツ語における存在文研究の出発点として、まず「どのような文を存在文と考えるか」について検討し、さらにこれまでの研究において取り上げられてきた論点の中から「場所格前置（以下Loc前置）」[2]と呼ばれる語順に関する議論、及び「es 挿入」[3]に関する議論の二つの代表的な問題を中心に整理・概観することにより、今後の考察への足掛かりにしたいと考えている。

1. 存在文の種類について

始めに「存在文」として本論で扱う対象の範囲を多少明確にしておく。そもそも存在文というと、直観的には「ある事物／事態が（S）ある場所に（Loc）ある／ない（V）」という表現形態をとって「ある事柄の有無を述べる文」であると考えられる。とすると存在文はこれら三つの成分、即ちS, Loc, Vそれぞれの観点からの分類が可能である。まずSに関してみれば、それが定名詞句（旧情報）であるのか不定名詞句（新情報）であるのかに基づく区分ができる。

(1) a. Die Vase steht auf dem Tisch.

　　b. Eine Vase steht auf dem Tisch.

実際この（1a）と（1b）とは別の文であると考えるのが、存在文研究では一般的である。また（1b）のように不定のものを述べる文のみを存在文とみなす見解もある[4]。いずれにせよ、情報構造からみて（1a）は主語の定名詞句を主題とする陳述がなされている典型的なテーマ・レーマ構造をもつ文であるといえる。一方（1b）では不定名詞句、即ち新情報の主語が文頭に立っており、通常のイントネーションでは幾分不自然であると言われることが多い。どうしても主語の部分に強勢が置かれがちになり、（1c）のようなLocの前置した文の方が普通であるとされたり、（1d）のようにesの挿入された文が用いられたりすることになる。なお、この点については次節以下で詳しく検討する。

(1) c. Auf dem Tisch steht eine Vase.

d. Es steht eine Vase auf dem Tisch.

それから周知のように、英語の there 構文ではごく特殊な場合を除き定名詞句を取れないことからも分かるように、定性／不定性の違いは存在文においては決定的な要因といえる。またこれは存在文の機能的な側面とも関連する問題であるが、このことは後に触れる。

次にLocについては、それが純粋に場所（空間）の表現ばかりでなく時間表現の場合もあるだろうし、daのように両者を兼ね備えた又は曖昧な副詞だけの場合もあろう。またSやVと異なりLocは文形成の上で必須の成分ではないので、表現されない場合（Es gibt einen Gott. など）も考えられるが、[5] 次節でみるように、Locは存在文では極めて重要な要素である。

さて今度は残るV、即ち動詞の面から存在文を考えてみる。まずドイツ語で存在文といった場合、おそらく誰もが文句なく認めるのは次のような文であろう。

(2) a. Ich denke, also bin ich.

b. Es war einmal eine Königin, die hatte...

(3) a. Ist jemand da?

b. Es ist kein Brot mehr da.

c. Hier sind reiche Bodenschätze vorhanden.

いずれもWahrig：Deutsches Wörterbuch から、sein 動詞による存在表現を集めたものであるが、sein 動詞に存在の意味のあることは古くから論じられている問題であり、改めて述べるまでもなかろう。但し、一般には存在を表現する場合は(3)のように da や vorhanden などの語とともに用いられるのが普通であると思われる。

ところで、英語の there 構文で be 動詞が頻繁に用いられている事実と比べると、ドイツ語で存在表現のために sein 動詞が使われるケースがあまり多くないことには注目しておく必要がある。例えば Erdmann (1978) では次のような英語とドイツ語との比較により、そのことが示されている。

(4) a. There are millionaires.

b. Es gibt Millionäre.

(5) a. There was no hope.

b. Es gab keine Hoffnung.

c. Es bestand keine Hoffnung.

(6) a. There will be no party tonight.

b. Es wird heute abend keine Party stattfinden.

いずれも(a)の英語の文に対してそのままドイツ語の sein 動詞を用いることは稀であろう。通常はes gibt というドイツ語ではもっとも一般的な存在表現のための非人称動詞が用いられる訳である。また(4)のような具体的な事物と異なり(5)のような抽象的な対象の場合は bestehen のような動詞が用いられることもあるし、(6)のような出来事の場合は stattfinden などのような事態の生起を表わす動詞の用いられることもある。

さらにLoc を含む存在文では、英語で be 動詞が普通に使われるのに対し、ドイツ語では sein 動詞の代わりに語彙的に類似する他の状態動詞を用いる方が一般的だと考えられる例がかなり多く見られる。Erdmann (1978) によればいずれも以下の(a) タイプの英語の文に対してはドイツ語では(b)よりも(c)の表現の方が好まれるという。

(7) a. There are some books on the table.

b. Auf dem Tisch sind ein paar Bücher.

c. Auf dem Tisch liegen ein paar Bücher.

(8) a. There's a man by the door.

b. Vor der Tür ist ein Mann.

c. Vor der Tür steht ein Mann.

(9) a. There is a picture on the wall.

b. An der Wand ist ein Bild.

c. An der Wand hängt ein Bild.

(c)タイプの表現が一番自然なのは、後に詳しく触れるように、ドイツ語では虚辞の esが英語の there に対応する形で用いられることが稀であること、それから既に述べたように主語の不定名詞句をそのまま文頭に据えるのも落ち着きが悪いこと、その他に sein 動詞だけでは there ＋be 動詞による英語の存在表現を担うのに手薄であることなどが考えられよう。いずれにせよドイツ語では、所在を示す状態動詞[6)]を用いて存在を表現すると考えられる文が実際にも数多く観察される。但しそうなると、一般の状態表現と存在表現との間の区別があまり明確ではなくなり、何を規準に存在文を規定するかという問題も出てこよう。冒頭にも述べたようなドイツ語における存在文研究の貧困さもこうした所に起因するものと思われる。いずれにせよ、ドイツ語には英語の there のような存在文を特徴づける明白な統語上の標識が存在しない以上、存在文かどうかの区別は意味上から判断するしかないので、現

状では議論に多少曖昧さが残るのはやむを得まい。

以上のことから大まかな傾向として、sein動詞や存在表現のための代表的な非人称動詞であるes gibt（但しこの場合は対象が4格目的語になる）の他に、状態を表わす動詞（liegen, stehenなどが代表例）、事態の生起を表現する動詞（bestehen, stattfindenなどが代表例）などを用いて「不定の事柄の有無について述べる文」を存在文と考えることができよう。[7] なお本論では特に取り上げなかったが、尾関（1985：102）にもまとめて記載されているように、存在を表わす動詞としてsich befinden, existierenなどがこの他にあることは言うまでもない。またhabenによる存在表現も存在文研究においては議論の対象となるが、Locが主語化している点で特殊なケースと考えられるので、次節のLoc前置の問題を検討する際に触れる。

2. 語順（いわゆるLoc前置）について

この節では、次のようなSとLocの語順について検討する。

(10) a. Eine Vase steht auf dem Tisch. （＝(1b)）
　　 b. Auf dem Tisch steht eine Vase. （＝(1c)）

(11) a. 「本が机の上にある。」
　　 b. 「机の上に本がある。」

「存在文の問題」（三上（[6]1973）に所収）などにおける三上章の議論は、（11a）のような文よりも（11b）のような文の方が自然ではないかというもので、「位格（locative）が主格に先立つのが自然語順だと思われる」と述べられている。そして「ニ～ガ」の語順の方が「ガ～ニ」の3.5倍もあるという国立国語研究所の統計などを引用してこの説を裏付けた。これを受けて久野（1973）は日本語と英語の存在文の語順についてかなり詳細な検討を加え、日本語の存在文の基本語順については「Loc＋S＋V」、英語の場合は「Loc＋V＋S」だとする理論的根拠を挙げた。そこからさらに彼は一連の議論で、英語のthere構文の文頭のthereは元来基底にあったLocのコピーであるという説を唱えたが、これについてはthereの二種類の用法を混同するものだとしてかなり旗色が悪い。[8] いずれにせよ日本語については柴谷（1978）のように「存在文は一般的に場所を表わす名詞句を文頭に置くのを基本的語順としている」という見方が有力である。

他方ドイツ語についてはこれらとは別にKirkwood（1969a）が以下のような英語との比較を通して、ドイツ語の存在文では「Loc＋V＋S（不定名詞句）」が無標の言い方だと述べている。

(12) a. There's a very good film on at the Royal.

b. Im Royal läuft ein sehr guter Film.

(13) a. There are several (some) books on the table.

b. Auf dem Tisch liegen mehrere (einige) Bücher.

(14) a. There's a car by the door.

b. Vor der Tür steht ein Auto.

(15) a. There was not a word of sympathy or understanding for Britain's predicament in the final communiqué.

b. Im Schlusskommuniqué war kein Wort von Sympathie oder Verständnis für Grossbritanniens Notlage zu lesen.

(12)～(15) は前節での(7)～(9)と同様の文だが、(a)の英語に対して(b)の言い方が一番自然なのは、先にも触れたように、不定名詞句が文頭にくるのはそれが特に強調される場合に限られるし、またesが文頭に立つ文がそれほど一般的に用いられる訳ではないことによる。勿論ここから直ちに結論めいたことを言うことはできないが、(b)タイプのような表現がドイツ語ではもっとも普通であると考えられそうなことは、直観的にも納得させられうるように感じられる。

例えばGerling／Orthen (1979) では存在動詞についてのリストが載せられているが、その中で主語が不特定のものを指す場合の例文は特に断りなしにLocが前置し主語が倒置している。

(16) a. In der U-Bahn stehen Leute.

b. An der Scheibe hängt ein Wassertropfen.

これなども不定のものの存在を表わす文ではLocが文頭に立つのが基本語順であるという考えに合致する事実であろう。

以下この節では、こうした議論と関連すると思われる事例をいくつか指摘しておくことにする。まずLyonsの研究以来、様々な言語で存在文と所有文との比較が問題とされるようになってきたが、ドイツ語ではKirkwood (1969 b) がこれを取り上げ、次のような例を挙げている。

(17) a. Die Stadt hat nur 10000 Einwohner.

b. In der Stadt leben nur 10000 Einwohner.

(18) a. Der Stuhl hat ein Schild.

b. An dem Stuhl hängt ein Schild.

またこれと並んで、一部の英語の there 構文はドイツ語では haben を用いて述べる方が普通だとする Erdmann (1978) の観察もある。

(19) a. There are three windows in this room.
b. Dieses Zimmer hat drei Fesnster.

(20) a. There is a big hole in your stocking.
b. Dein Strumpf hat ein großes Loch.

(21) a. There are only two hundred boys in the school this year.
b. In diesem Jahr hat die Schule nur 200 Jungen.

このようにドイツ語では存在表現に haben が好んで用いられるという事実は、ドイツ語の haben を用いた文の数多くが日本語では「～には～がある」と翻訳されているという中沢 (1985) での指摘とも関連するものといえる。このような存在文と所有文との関連について繰り返し筆を割いている Lyons (1968、1977) を待つまでもなく、所有文の主語が Loc から派生し Loc 前置を文法形式の上でも具現したものであることは明白である。このことは同時にまた存在表現における我々の意識の上での Loc の重要性、即ち基底において既に Loc が先頭に立つことが多いのではないかという印象を裏付ける例証の一つであろう。

それから舞台作品のト書きなどを見ると多くの場合次のような表現が見受けられる。

(22) Nacht. Aus der Tiefe des Hintergrundes leuchtet der Feuerschein. (Wagner : "Götterdämmerung")

(23) Links unf rechts je zwei Türen. In der Mitte ein runder Tisch. Im Hintergrund sieht man Zurichtungen zu einem Haustheater.[9] (Hofmannsthal : "Ariadne auf Naxos")

これらの例のように舞台設定をする際には、場所から規定していく場合の方がその逆の場合よりも多いのではなかろうかという印象を今回調べた限りでは得られた。またこれと似た例だが、次のような物語の冒頭のような場面では Loc が深層で既に文頭に立っていると考える方が、同一指示の解釈の上からも自然であるように思われる。

(24) a. Im armseligen Haus des Färbers balgen sich seine schmarotzenden Brüder.
b. ?In seinem armseligen Haus balgen sich die schmarotzenden Brüder des Färbers.

((24b) は sein ≠ Färber の解釈の時は完全に文法的な文である。)

もっとも舞台や物語で場面設定をする際にはLocから規定するのが普通であり、ここから直ちにLoc前置を結論づける訳にはいかないにせよ、何らかの関連は認めてもよかろう。

またBolinger (1977) では(25)のような文に端的に見られるような「呼びかけ＋場所＋視覚対象」という順序を自然な語順であるとみなしている。ここにもある対象の存在を表現する際のLocの語順の上での優位性が認められるように思う。

(25) Look! On your leg! A tarantula!

Loc前置を基本語順とする考え方は直観的にみても、またいくつかの言語事実からみてもある程度説得力と魅力のある説といえる。但し根本的には我々がある対象を知覚する場合、事物と場所のどちらを先に認識し表現するのかという困難な問題として帰結してくるものであろう。また最終的には単一の文だけで判断できる問題ではなく、前後の文脈や場面を考慮する必要性のあることも当然である。しかし多くの研究で繰り返し主張されている事実からみても、そうした傾向をある程度認めるのは人間の言語を考察する上で有用なことであると思われる。

3. es挿入について

この節では始めにも示した次のような二つの文の比較を取り上げる。

(26) a. Eine Vase steht auf dem Tisch. (= (1b))
b. Es steht eine Vase auf dem Tisch. (= (1d))

2節では(26a)のような不定名詞句が文頭に立つ文よりは、Locの方が文頭に立つ文の方が自然であるという説をいろいろ検討してきたが、この節ではLocの代わりに虚辞のesと呼ばれる成分が文頭に立つ場合を考察する訳である。そもそもこのes挿入という名称は英語での there 挿入からの類推で用いられているものと思われるので、まずこれらの比較をしてみる。esを文頭に立てる文が(27a, b)のように、英語の there 構文と構造的に類似点をある程度持つことはPütz (^{2}1986) でも指摘されている。

(27) a. There is a book on the table.
b. Es liegt ein Buch auf dem Tisch.

c. On the table there is a book.

d. Auf dem Tisch liegt (*es) ein Buch.

しかし(27d)のようにLocなどの別の成分が文頭に来ると、ドイツ語では周知のようにこのesが文中に生起することはもはや許されなくなる。ドイツ語のesには英語のthereとは異なりこうした統語上の制約があるが、逆に意味上では英語と異なりどのような動詞とでも生起しうることは、しばしば指摘されている通りである。[10] 従って(28b)や(29b)の文を存在を表わす文とみなしてよいかどうかという問題も生じてこよう。[11] このように述語制限の点ではほとんど制約を受けないとはいえ、(30)や(31)のように英語と同様ある程度の定性制限は受けると考えるのが一般的だといえる。[12] 但しesが文頭に立つ頻度は英語のthereと比べて少なく、用いられうる環境が極めて限られていることにも留意する必要があろう。

(28) a. *There shouts someone.

b. Es ruft jemand.

(29) a. *There demonstrate a group of students.

b. Es demonstriert eine Gruppe von Studenten.

(30) a. Es waren viele Menschen um seine Rettung bemüht.

b. ?Es waren meine Eltern um meine Erziehung bemüht.

(31) a. Es hat jeder Mensch seine Schwächen.

b. *Es hat Hans seine Schwächen.

従ってesをthereと比較することは、統語的にも意味的にも必ずしも有意義ではないと言われてもやむを得まい。[13] しかし不定名詞句を文頭に立てないという情報構造からみた機能的な側面に関しては、ある程度の共通性を認めてもよかろう。そこでこの節では、主にこの観点から考察していくことにする。

その前にこのes挿入に関する統語的な説明としてBreckenridge(1975)とTomaselli(1986)の二つを検討しておく。まずBreckenridgeのものはes挿入をi)新情報の主語を右方に移動する、ii)主節動詞の前に他の成分がない場合にesを挿入するという二つの規則に分けて定式化した簡単なものだが、直観的には頷ける提案である。これに対してTomaselliの説明は完全に統語論的なもので、Lenerz(1981)などに代表される近年の生成文法の考え方に基づく(32a, b)のようなドイツ語における二つの基本的な規則を想定する立場に立ち、(32c)のフィルターを設定する。R1で定動詞がCOMP1に移動した場合、このフィルターにより通常の平叙文ではCOMP2が〔e〕のままでは

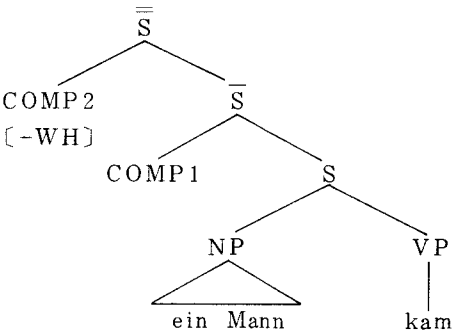
非文となる。従って必ずＲ２を適用してＣＯＭＰ２に定動詞以外の成分を移動させるか、或いはＲ２を適用しない場合はその代わりに虚辞のesを挿入するかして、COMP２の位置に何らかの成分を充たさねばならないという訳である。いわばドイツ語のいわゆるＶ２制約と呼ばれる現象を、統語規制により規定したものとみていいだろう。COMP2にesを挿入する方が選ばれた場合、(33b)のような構造になる。[14]

(32) a. Ｒ１　定動詞をＣＯＭＰ１に移動する。

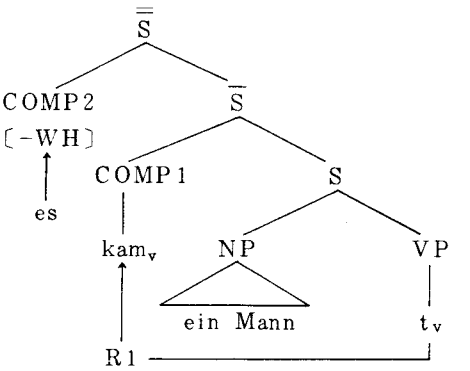
b. Ｒ２　定動詞以外の成分をどれかＣＯＭＰ２に移動する。

c. Ｒ１が適用された場合、ＣＯＭＰ２が〔e〕で〔－WH〕なら不適格である。

(33) a. Ｄ構造



b. Ｓ構造



(34) a. Er$_i$ ist$_v$ t$_i$ gestern gekommen t$_v$

R1

R2

b. Gestern$_i$ ist$_v$ er t$_i$ gekommen t$_v$

R1

R2

c. *Es ist$_v$ er gestern gekommen t$_v$

R1

しかしこのような統語的な説明だけではTomaselli 自身も(34)のようなes挿入が許容されない例を挙げて言っているように、いかなる条件の下でこのes挿入が選択されうるのかは明らかではない。またesの挿入された文と挿入されない文との間のニュアンスの違いも不明であり、これらの文を別の文と考える立場からは全面的に受け入れられるものではない。従ってどのような意味でesが挿入さ

れているのかについてはさらに別の角度からの考察が必要である。

そこで次に幾分機能的な観点からの説明を検討してみる。これはHelbig／Buscha（[9]1986）を始め、Kemme（1979）など多くの文献でみられるが、主語が重要な情報の場合にesを文頭に立てることによって主語を倒置させ動詞の後に移すというものである。特に主語が不定冠詞や数量詞を伴う不定なものの場合にはよく用いられるとしてHelbig／Buschaでは次のような例が示されている。

(35) a. Der Unfall hat sich am Abend ereignet.

b. Es hat sich gestern ein schwerer Unfall ereignet.

(36) a. Das Einfamilienhaus ist in den letzten Jahren gebaut worden.

b. Es sind in den letzten Jahren viele Einfamilienhäuser gebaut worden.

このような説明はこれまでの所もっとも一般的に承認されているといえ、esが挿入される根拠についてはある程度納得できる。しかし主語を単に倒置させるだけならば主語以外の別の成分（特に場所や時間の副詞句など）を文頭に移動させることによっても可能であり、何故わざわざesが用いられているのかについては依然として明白ではない。

既に言及したように、ドイツ語のesには英語のthereとは統語的にも意味的にも相違点があるが、情報構造の点、即ち主語を倒置させるという機能的な側面では類似性があると思われる。本論ではあえてesが挿入されているところに何らかの意義を認める立場から、ここでこの英語のthereの機能的な特徴についての端的な主張を取り上げてみる。例えば福地(1985)ではbe以外の述語をとるthere構文について次のように述べられている。

(37) 『何かについての話者の論理的判断を述べる「主題－題述」型の文ではなく、単にある事物をありのままに談話の中に導入する提示的な文であると考えてよい』

この小論は、英語におけるthereの提示性をドイツ語のesにも認めることを提案するものである。このような視点からみると、例えば先の（35b）や（36b）の文では、esの挿入によって情報をまとめて提示的に述べるような傾向をもった文になるのではないかと考えることができる。勿論このような説明はまだ大まかな一般化でしかないし、es挿入をドイツ語のいわゆるV2制約の単なる帰結に過ぎないと考える立場からはもっとも対極的な見解であろう。しかしesが無意味に挿入されている訳ではないと考える上では、重要なヒントになるのではないかと思うのである。

いずれにせよ、このように考えて始めて次のような文のesの有無による微妙な意味の違いがある程度説明できるようになると言えるであろう。[15)]

(38) a. Der Frühling kommt.

b. Es kommt der Frühling.

(39) a. Die Hunde bellen.

b. Es bellen die Hunde.

(40) a. Jeder Mensch hat seine Schwächen.

b. Es hat jeder Mensch seine Schwächen.

(41) a. Da war mal ein armer Mann.

b. Es war ein Mann, der hieß Frieder.

例えば(38a)の直接的な表現に対し、(38b)では幾分距離を置いた中立的な表現となるようにみえる。また(39a)には特定の犬がほえていることを述べる場合と、犬がどこかでほえていることを漠然と述べる場合の二つの意味があるが、(39b)では後者の方の意味しかなくなると考えられる。さらに(40b)は(40a)と比べて事柄を中立的に叙述しているという感じが強く、これ自体で一つのテクストを完結させているという印象も受ける。[16] また物語の冒頭部においては(41a)のように時間や場所の副詞句が文頭に立つこともあるが、まさに登場人物を物語の中に提示的に導入する場面な訳で、(41b)のようにesで始まる方が圧倒的に多いのは言うまでもない。

この節の最後に最近の雑誌からの例をいくつか拾ってみる。いずれもここで触れてきたような提示的性格を促すのに、即ち新情報としての主語についての陳述をまるごと記事の中に導入するのに、文頭のesが大きな役割を果たしているように感じられる文である。

(42) Es werden durchweg gängige Melodien angeboten.

(43) Es dürfen keine spitzen Höhen vorkommen und keine zu tiefen Bässe.

(44) Es droht, wie nun oft zu hören ist, der Verlust der musikalischen Ausdrucksfähigkeit. (Der Spiegel. Nr. 28/1986)

このesと生起しやすい動詞、及びesが文頭に立ちやすい環境などの詳細な点についてここから先の解明が極めて重要である事は言うまでもない。しかしこれらについては今後の検討課題とせざるを得ない。また非人称受動においてesが文頭に挿入される場合も、ここで述べてきたような提示性と関連するのではないかと思えるが、これについても今後さらに検討する必要がある。

4. まとめ

本論では存在文を「不定の事柄の有無を述べる文」と考えた場合、以下のような三種類の述べ方があ

り、(45a)よりも(45b)の方がより無標の表現であると考えられがちであること、さらに(45c)の場合は存在の有無を談話の中に提示的に導入する述べ方になるのではないかということを主に論じてきた。

(45) a. Eine Vase steht auf dem Tisch.

b. Auf dem Tisch steht eine Vase.

c. Es steht eine Vase auf dem Tisch.

ところで、これまで「提示的」という用語を折りにふれて用いてきたが、この概念は Brentano や Marty が存在文を特性づけるために提案して以来、繰り返し主張されてきたという背景があるので、ここで最後にまとめて整理しておくことにする。

まず人間の判断を単純判断(einfache Urteile)と二重判断(Doppelurteile)という二つのタイプに分けたBrentano が、ここでの考え方の出発点であるといえる。その後を受けて、これら二つの判断と言語表現との関係についてさらに発展させ広めるのに貢献したのが Marty である。Marty (1940)ではこの二つの判断は措定判断(thetische Urteile)と定言判断(kategorische Urteile)[17]とも言い換えられているが、簡単に言って≪A ist≫や≪A ist nicht≫のようなものが措定表現、≪A ist farbig≫や≪A ist von B verschieden≫のようなものが定言表現と呼ばれている。つまり、あるものの存在などを単純に述べるだけなのか、主語について何らかの陳述をするのかの違いである。日本でも中島(1939)で既にこの判断の区分に基づく表現形態の考え方が紹介されているが、近年になってからもKuroda(1972)で存在文や非人称構文を措定判断に基づく文とする考え方が取り上げられている。

その後Kirkwood(1977)でもこの区別が用いられているが、彼はそれぞれのタイプの文を措定文(thetic sentence)と叙述文(predicative sentence)と呼び、「叙述文は主語ー述語、トピックーコメントの構造を持つ。これに対して出来事、過程、状態、状況の中立的叙述である措定文はトピックを持たず、意味レベルでの主語・述語に分析できない」と先の(37)の引用とほぼ同様のことを述べている。そして措定文においては(46)のような構造、即ち名詞句からの外置が許されることを示している。

(46) a. Über die neuesten Entwicklungen wurde ein Bericht gegeben.

b. Es wurde ein Bericht gegeben über die neuesten Entwicklungen.

(47) a. *Über die neuesten Entwicklungen wurde ein Bericht besprochen.

b. *Es wurde über die neuesten Entwicklungen ein Bericht besprochen.

これは福地（1985）でも指摘されている事だが、（46）は単に「報告が出された」という出来事がそのまま述べられている文であり、文全体として新情報を提示的に述べる文であると言うことができる。これに対し（47）の文は、「報告」の存在を既に前提として、これについて「議論された」という判断を加える典型的な「主題－題述」型の叙述文である。そのため、このような外置構造は話者の意識の中で既に前提とされている「報告」の存在と相入れないものであり、許容されなくなるものと思われる。

さてこの小論でこれまで考察してきた存在文も、（46）のような提示的な文と同様の性格、即ちまだ存在が前提とはされていないものを導入するという特色を持つことは言うまでもない。「ある事柄の有無を述べる文」が、存在がまだ話題の中では前提とはされていない物事の存在について述べる文であることは当然だからである。この点に本論では別個に扱ってきた（45b）と（45c）の二つのタイプの文の共通点を見いだすこともできよう。さらに1節で指摘した存在表現を通常の状態表現からどう区別するのかという問題にも、これが一つの判断の規準となるであろう。[18] また3節でみてきたesの挿入が許容されるかどうかという問題にも、今述べた点が関連してくるはずである。そこで存在文の考察においては、（46）のような提示的な文との関連についても、今後十分に検討していく必要性が認められる。以上この小論ではドイツ語の存在文を考察する上で生じると思われる問題点を包括的に概観してきたつもりだが、個々の点についてはまだまだ解明すべき余地が多く残されており、それらをさらに掘り下げて行くことが今後の課題である。

〈 註 〉

1) Tschauder（1979：36）

2) この用語はMilsark（1979）の「Loc－Front」による。

3) これはBreckenridge（1975）、Haiman（1974）などで用いられている用語である。

4) 三上（1975：342）によれば、定名詞句の場合は、「アル」の意味よりも「位置スル」の意味が強くなるという。

5) Lyons（1968）では「『存在のbe動詞』は英語では場所的または時間的補語を伴わない場合にはまれである」（國廣監訳 ^{3}1978：435）と言われているが、ドイツ語でも同様であろう。

6) Wunderlich（1984）ではこうした動詞はPositionsverbenと呼ばれている。

7) なおここでの「事柄」とは「事物の存在」や「事態の生起」なども含めて考える。

8) Milsark（1979：116ff）　Tschauder（1979：130f）

9) なお（23）は初めの二つの文には動詞が欠けている特殊な例である。また最後の文は知覚動詞sehenを用いた一種の存在表現といえる。ちなみに次のような文は、実際ドイツなどではよく耳に

する表現であろう。

i) Hier sehen Sie das Rathaus.

存在文と知覚動詞との関係についてはMilsark（1979：90ff）などでも議論されている問題であるが、ドイツ語では今後の検討課題であるといえる。

10) (28) と (29) は Erdmann（1978：198）による。英語の there 構文は be 動詞以外は出現や生起を含意する動詞に限られることはよく知られている。

11) 但し、後に触れるこの種の文の提示的性格から、例えば（28b）は日本語では「誰か呼ぶ人がいる」に近い意味に解釈できるのではないかとも考えられる。

12) (30) と (31) は Haiman（1974：17f）による。但し次のような文は定冠詞付きでも許容されており、定冠詞が必ずしも定性を示すとは言えない。

i) Es klingen die Glocken.

ii) Es bellen die Hunde.

なおこれらは次の文と同様に、何らかの音の生起と関連するように思われる。

iii) Es klopft jemand.

13) Pütz（^{2}1986：47）

14) (33) の図は Tomaselli（1986：173f）のものを多少簡略化してある。

15) (38b) (39b) (40b) の文は Haiman（1974）に、(41) の文は Erben（1979）による。

16) Kemme（1979：27）ではこのような文は「テクスト内の環境を必要としない短いテクスト」とも呼ばれている。

17) この日本語訳は中島（1939）による。

18) 従って、次のようなLoc が前置した状態表現で、人名のような固有名詞が主語の場合でも、その存在を話題（物語）の中に初めて導入するような文脈では、一種の存在文と解釈できる可能性を有しているようにも思われる。

i) Hinter einer Säule steht Walther von Stolzing.

ii) Auf den Bergeshöhen über dem Rhein schlafen Wotan und seine Gattin Fricka.

Literaturverzeichnis

Bolinger, D. L. 1977. Meaning and form. London.
〔中右　実訳『意味と形』　東京（こびあん書房）1981.〕

Breckenridge, J. 1975. The Post-Cyclicity of *es*-Insertion in German. CLS 11. 81-91.

Erben, J. 1979. Zur „Multivalenz" von *es* im Neuhochdeutschen und im Sprachstil der Grimmschen Märchen. WW 29. 384-391.

Erdmann, P. 1978. *There* Constructions in English and German. IRAL 16. 187-211.

Fricke, H. 1983. "es". Deutsche Vierteljahrschrift 57. 1-17.

福地　肇. 1985.『談話の文法』　東京（大修館書店）

Gerling, M. und N. Orthen. 1979. Deutsche Zustands- und Bewegungsverben. Tübingen.

Haiman, J. 1974. Targets and Syntactic Change. The Hague.

Helbig, G. und J. Buscha. [9]1986. Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Leibzig.

Kemme, H-M. 1979. Der Gebrauch des *es* im Deutschen. Eine Darstellung für den Unterricht an Ausländer. München.

Kirkwood, H. W. 1969a. Aspects of word order and its communicative function in English and German. JL 5. 85-107.

Kirkwood, H. W. 1969b. Remarks on existential-locative and possessive-locative sentences in English and German. Philologica Pragensia 4. 230-237.

Kirkwood, H.W. 1977. Discontinuous noun phrases in existential sentences in English and German. JL 13. 53-66.

久野　暲. 1973.『日本文法研究』　東京（大修館書店）

Kuroda, S.-Y. 1972. The Categorical and the Thetic Judgment. FL 9. 153-185.

Lenerz, J. 1981. Zur Generierung der satzeinleitenden Positionen im Deutschen. In: M. Korth und J. Lenerz (hg.). 1981. Sprache: Formen und Strukturen. Tübingen. 171-182.

Leys, O. 1979. Zur Systematisierung von *es*. DS 7. 28-34.

Lyons, J. 1968. An Introduction to Theoretical Linguistics. London.
〔國廣哲弥監訳　『理論言語学』　東京（大修館書店）[3]1978.〕

Lyons, J. 1977. Semantics Ⅱ. London & New York.
〔Semantik. Bd. 2 übersetzt von J. Schust. München. 1983.〕
Marty, A. 1940 ([2]1965). Psyche und Sprachstruktur. Nachgelassene Schriften herg. von O. Funke. Bern.
三上 章. [6]1973. 『象は鼻が長い』 東京（くろしお出版）
三上 章. 1975. 『三上章論文集』 東京（くろしお出版）
Milsark, G. L. 1979. Existential Sentences in English. New York.
中澤三津子. 1985.「『所有の動詞』habenについて」：浜崎他（編）『日独語対照研究』東京（大学書林）108－112頁
中島文雄. 1939 ([17]1980). 『意味論』 東京（研究社）
小倉貞秀. 1986. 『ブレンターノの哲学』 東京（以文社）
尾関 毅. 1985. 「存在表示について」：浜崎他（編）『日独語対照研究』 東京（大学書林）102－107頁
Pütz, H. [2]1986. Über die Syntax der Pronominalform „es“ im modernen Deutsch. Tübingen.
柴谷方良. 1978.『日本語の分析』 東京（大修館書店）
Tomaselli, A. 1986. Das unpersönliche „es“ — Eine Analyse im Rahmen der Generativen Grammatik. LB 102. 171－190.
Tschauder, G. 1979. Existenzsätze. München.
Wunderlich, D. 1984. Zur Syntax der Präpositionalphrasen im Deutschen. ZS 3. 65－99.

（大学院博士課程）